

令和 3 年（2021 年）1 月 16 日実施**第 1 回大学入学共通テスト「英語リーディング」、および「英語リスニング」の講評**大学入試のあり方に関する検討会議 配布資料
渡部良典

令和 3 年 1 月 16 日、17 日、30、31 日両日にわたって大学入試共通テストが実施された。共通テストはセンター試験に引き続き学習指導要領に基づいた唯一の全国規模のテストとして重要な役割を担っている。開発と実施には優秀なスタッフで構成された委員が十分な時間をかけて細心の注意を払って行われるが、今回は特に新型コロナウイルス感染症の状況下において特に腐心されたことは想像に難くない。大学入試センターおよび作成委員、実施に係った多くの方々の方々の労を多としたい。

この文書はさらなる改善を期待して私見を述べたものである。詳細な検証は大学入試センターが主体となって行われることを承知している。ここで述べたことがその際の一助として頂けることがあれば幸いである。

センター試験から共通テストへ変化の特徴

実施直後の報道の多くは共通テストが大きく様変わりをしたことを伝えた。変化の特徴を第二言語習得研究の観点から分析し、検討課題と合わせて以下に記載する。

第一に、構造を重視した言語観から機能言語学的言語観への移行である。従来の語彙、文法、文章の構成等、言語の構造を問う問題は姿を消し、言語を使って何ができるかを重視する機能的言語観にシフトした。CEFR は A1 から C2 までの各レベルでは対象言語を使って何ができるかを示す、いわゆる can-do statement を言語能力の指標としているが、共通テストにはこの影響が見て取れる。CEFR を枠組みとしているということが公表されているわけではないが、学習指導要領は CEFR の機能言語学的側面に影響を強く受けていることは明らかであり、共通テストが学習指導要領の内容を強く反映していることから、CEFR と共通テストの間に関連性が認められることは極めて自然なことである。一方、近年は English Profile というプロジェクトにおいて、A1 から C2 に至る各レベルにおいてどのような語彙、文法構造が使えるかを対象とした研究が盛んに行われていることにも注意を喚起したい。今後 CEFR で行われている言語構造への視点が共通テストにどのように反映されるのかについて注視してゆきたいところである。

第二に、基本的な言語運用能力の重視である。BICS（Basic Interpersonal Communication Skills）と CALP（Cognitive Academic Language Proficiency）はカナダの言語学者 Jim Cummins が二か国語使用の研究において立てた区別であるが、言語能力一般を考察する際にも役に立つ。BICS は日常生活を営む上で必要となる基本的な言語能力であり、CALP は認知的に高度な能力が要請される言語能力である。新学習指導要領は「知識および技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」を 3 本柱としているが、「思考・判断」に係る英語能力が CALP に近い意味合いを持つ。共通テストでは英文の構造や語彙、特にトピックにおいて BICS に重点が置かれているように見受けられる。学校教育における英語力の測定が目的である以上配点およびテストの測定範囲において BICS と CALP がバランスよく配分されているかどうか検討が必要である。

共通テストの主たる目的は高等学校までの内容を習得できたかどうかを確認するための到達度 (achievement) の検証であるが、大学入試の一環である以上、入学後に要請される熟達度 (proficiency) の測定も必要である。例えば、リスニング・テストの第5問は授業で行われている講義の内容理解を問うている。一方、第6問は4名の生徒の日常的な話題とした会話を聞き取らせる課題である。これらを合体して、英語の講義に対して生徒が英語で質問している場面を設定した課題なども可能である。こうすることにより、大学入学後を見据えた英語運用能力の評価を合わせて行うような課題設定の可能性を探ることで大学入試としての意義を高めることができるように思われる。

第三の傾向は、明示的言語習得観から暗示的言語習得観への移行である。明示的 (explicit) 指導法は重要な語彙、文法、文章構造等を教師が説明し、練習を重ねることによって習得を促す。それに対して、暗示的 (implicit) 指導法は意味の理解を通して生徒が無意識のうちに語彙や文法を習得することを重視し、語彙や構文の説明は最小限におさえる。共通テストでは発音、語彙、文法問題が廃止されたが、これは暗示的指導の効果を前提としているからであろう。しかしながら、第二言語習得研究の示すところ、暗示的指導法が明示的指導法よりも優れているわけではない。むしろ、学習効果を上げるためにはそれぞれ果たすべき役割が異なることを示している。例えば、これまで筆記で行われていた、発音や語彙、文法の問題をリスニング・テストで行うなどという選択肢もあり得る。実証研究に基づいた見直しの可能性を検討する必要があるのではないだろうか。

テストに関する情報の事前公開について

以上、共通テストをセンター試験からの変化を位置付けることにより比較検討した。このような大きな変更が行われる場合、事前に受験生と関係者各位に例とともに説明されていることが公平な実施のための要件となる。これは特に大規模テストの実施には欠かせない条件である。今回の実施直後大きな変化が大きく報道されており、中には受験者の戸惑う声も報告されていた。しかし、事前の理解が十分であれば変化が話題となることはそもそもあり得ないことである。話題になるとすれば、その原因は通知の仕方が十分でなかったか、あるいは受験者の準備不足だったかのどちらかである。どちらにせよ今回の実施に関しては、改善の余地が残されているように思われる。

大学入試センターは詳細な情報を公開しており、A4で330頁に及ぶ受験案内も含まれている (https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_jouhou/r3.html)。英語については、4頁から5頁という目につきやすい箇所に変更点が記載されており配慮が行き届いている。一方、内容の方は、「英語の出題方法等において外国語の英語 (筆記) の名称を英語 (リーディング) に変更すること、大学入試センター試験で出題されてきた発音・アクセント・語句整序などを単独で問う問題は出題しないこと、英語表記は現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて、場面設定によってイギリス英語を使用することもあること、リスニングの音声を流す回数に関する事等々に関する情報であり、具体性を欠いているようにも見受けられる。テストの内容、実施方法等に加えて、事前に提供した情報の量と公開の方法が適切であったかどうかについても検討されることを望みたい。

テストの設計と内容にかかわる件3点

最後に、テストの形式・内容に改善すべき余地があるように思われる。例えば、リーディングの問 2 A, B, 問 3 A, B では英国が、問 5 ではフランスが場面として設定されている。しかし、多様な英語 (World Englishes) が許容され、認知される今般において、アジア圏その他非英語圏をトピックとし文脈とした課題を設定する必要はないだろうか。あるいは、リスニング・テストの問 6 B では 4 人がレシートについて議論をしている場面においてその内容を聞き取らせる問題があるが、内容の聞き取り以前に音声の聞き取りだけで 4 名の話者の区別をすることは言語能力以外の能力を測定している可能性もある。測定結果が課題の目的とどの程度整合性を持っているか検証が必要である。

最後に、質の高いテストは必ずしも質の高い指導や学習を保証するわけではない。両者は異なる次元の課題である。今回の共通テストに向けて特別に指導に心がけたことはあるのか、あるとすればそれは指導法、指導内容においてどのようなものだったのかを、受験者の学習方法と内容とともに検証することは、共通テストの影響を知るうえで貴重な資料となることが期待される。

以上。